仇討
追
お玉

部落問題文芸・作品選集

第26巻

錦城亭貞玉演

鳥追お玉（下）

世界文庫版

部落問題文芸作品選集　第二六巻

昭和五十年七月二十五日発行

発行者　松本富夫

発行所　株式会社世界文庫

東京都目黒区洗足二―一二―一五
電話　〇三（七一六）六一五一（代表）
（七一三）九二四四（夜間）
振替　東京　七八四九八番　〒一五二

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

仇討 鳥追お玉

錦城齊貞玉講演
速記社社員速記

第十七回

他人の金品を借りて之れを返すのは當然のこと不服を言ふべきでありませぬが此の閻魔の喜右衛門といふ奴は困より强慾な金貸でございます、尤も金を貸すのに人情ばかりを酌んでゐては中々貸したものが取れませぬ唯今以て高利貸は澤山あります併し十人が十人斯ういふ人ばかりはございませぬ其の寶喜兵衛は前申上げまする通りおたまに惚込んでをりまして十兩の金子でおたまを自己の自由にしやうといふ積りであつたゆゑ先方が返さぬのを幸ひ今日は此處へ來つて遂におたまを連れて行かうとする、

所へ集まる小屋者七人　○「何だ〳〵」由五郎「どん」　△「ヤア其奴は瓦町の閻

魔だ〳〵　殿つちさへ〳〵　×「べらぼうめい巳達ア今ぢやア斯ういふ小屋者になつてるが元から小屋者になつてるが、元から小屋者ぢやアねい殊におたさんは立派な御大名のお嬢様ぢやアねいお公卿様のお姫様だ　○「なに將軍様のお落胤だ」なぜゝ分らぬことを銘々勝手に申し突然其の中の長太郎といふ氣早な男子が飛込んで喜兵衛の横面を等固でポカーリ打ちさした　喜「此の野郎サア太い奴だ此の乞食共めが……喜兵衛を打つたナ　長「打つたがどうした喧嘩の相手は長太郎だサア汝は眞人間の分際で何故小屋へ這入つて來て由五郎どんの家を穢した」得手勝手なことをいふもので眞人間の分際なぜゝは轉倒な言葉無法なことを致すに依つて喜兵衛も中々小力のある奴「何をするつ」と長太郎を突飛ばす續いて來る二人三人、中にも雪駄直しの勘太郎が「ヤアッンな奴は擲アこたアねい雪駄の針で突殺しちさへ」亂暴な振舞に據ろなく喜兵衛は其の儘此處を逃げやうとする所を酒に醉つてをりさした八右衛門といふ奴が突然丸太で喜兵衛の向臑を拂ひ其處へ倒れるのを二ッ三ッ續け

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

て打ちました為めに既に喜兵衛は死んだかと思ふばかり

由五郎夫婦は「マア〳〵皆さん待つて下さい……そんな手荒なことをしちやアならねい……オヽ大變だ喜兵衛さんを大変なことをしなすつた」由五郎は皆一同の者が自分に助力をして呉れるのは辱いが曾ぞやも水谷善兵衛さんの一條で苦勞をし又頭の車善七親方に迷惑を掛けることが出來たと大に心配を致しました、

其の中におさきが來つて喜兵衛を抱起す、おたまも共に來て「どうぞ氣を確に持つて下さい　喜「アヽ痛い〳〵……サア太いことをしやアがつた此の分ぢやア差置けねい今に見ろ汝達は皆上お役人の手に掛けて磔刑に行ふか斬首にして遣るから此奴等ア一同覚悟をしろ」喜兵衛は倒つ轉びつ瓦町の我が宅へ立歸りました、

サア其の後で八右衛門といふ奴は飛んでもねいことをした餘り已れが手荒いことをしたので歩くことも適はず這ふやうにして行つたが今野郎の言葉に上のお役人に訴へるといつた、訴へられちやア大變だモウ斯うなも

やァ仕方がねいとそこは斯ういふ身分ですから後難を恐れて直ぐに其の場から二人三人トウ〳〵江戸を逃て舞仕つた者もございます、

由五郎は「どうしたもんだらうかさき是りやァお前も已れもおたまも三人此の江戸に住はれねい、卓のお頭さんに彼の喜兵衛から訴へられちやァ曾ぞやも善七親方が水谷さんの一条で大層親切を盡して下すつたが又已達がこんなことをした、どうしたもんだらう　さき「マア何にしても直ぐに車の親方へ、自家のことは兎に角も……」といふので由五郎は急いで浅草田圃の卓善七の所へ駈付けた、

由「どうかお頭さんにお目通りを願いたい」扨て前にも述べる通り善七はさういふ仲間へ對しては大した權式のもの庭へ廻らして「何だ由、又何か事が出來たか　由「ィヤ大變なことが出來た　善「どうした」といふから此の度の長雨に付て小屋者一同の難儀それを救はんと自分が借主になつて蔵前の閻魔の喜兵衛から金子を借りた一條から喜兵衛が無理催促おたまを手込にして自分の家へ連れて行かうとするゆゑ女房のおさきと兩人で之

れを拒んでゐる所へ小屋の者が大勢來て腕貸をして喜兵衛を是れ〳〵と評しく話す聞くより車善七が「そりやあ大變なことだ」「マア〳〵 仕方がねいお前達三人は新堀端の小屋にはゐられねいから今夜の中に巳れの所へ來て隱れてゐろ 由」「併しお頭さん万一公儀へ訴へられたら……」 善「其の時は此の善七が引受けて遣る全体彼の喜兵衛といふ奴には堂前の連中も酷い目に遭つてゐる、眞人間と交りの出來ない小屋者に金子を貸付けてゐるのは普通の金子より儲かるからだ、なに宜い若しものことがあつたら此の善七が引受けて遣る今夜の中に此處へ來いシテ小屋の者はどうした 由」ハイ八右衛門や勘太郎は餘り毆り方が酷かつたので江戸を逃げ去つて仕舞ひました流石物の総括を致しまする善七親方ッッタリ引受けて呉れましたから其の夜に新堀端の家を閉めまして車善七の家へ行つて三人は隱れてをりました、

此方は喜兵衛家へ帰りますとサア身体の節々が痛み出す女房が何だ」と聞くから斯う〳〵といふと「そりやア捨置かれぬ」と直ぐに猿屋町にをります

る淺草の大名主大塚吉右衛門方へ駈込みました、

大塚吉右衛門は喜兵衛の女房お虎の訴へに一々之れを尋ねまするとお屋者由五郎の家へ參つて云々と述べ隙て此の大塚吉右衛門も閻魔の喜兵衛と綽名を取る位強慾な高利貸といふことは存とてをりますゆゑ是れは私の方で事を扱ふことは出來ない　虎「それは名主樣何で出來ませぬ　吉「何でといつて非人小屋へ金子を貸して事が出來たといふのであるから公邊へ持出すことは出來ない　虎「左樣ではございますが、名主樣私の家の喜兵衛が非人共に彼の樣に叩かれまして假令身体は癒りませうとも不具者になるは必定、それをお役場の貴方が取扱つて下さるのは……　吉「出來ないつ　虎「それはご無理でございます　吉「何が無理だ之れを取上げる時に於ては却つてお前の夫喜兵衛は非人と交際を致した廉を以て上ご法通りお処刑になる」道理に迫つて女房お虎も仕方がなく我が宅へ立戻りました此の高利貸などをしてゐる慾深き奴等は斯うして遣りたいものでございますィヤ是れは講演者の僧まれ口が知れませぬ借りる者があるから貸す者

がある借りる者も随分ヅウ〳〵しく借りれば貰つたやうに思ふ人もありますからさう高利貸の悪口は言へませぬが先世間一般こんなものでありませう、

そこで仕方がありませぬから喜兵衛も女房のお虎と相談してマア〳〵こんなことを願つて出て已れがお上からどんなお咎を受けるか知れない不具者にならうと仕方がない向ふの相手が乞食だから已むを得ないと斷念て早や一月ばかり經ちました段々傷は癒つて參りましたがトウ〳〵閻魔の喜兵衛左の足は膕の關節の辺りを打たれまして癒すは癒つても跛足になつて仕舞ました、

然るに車善七の方では定めし公儀へ訴へたらう、何とかご沙汰があるだらうと待つてをりましたが別に沙汰がない、所へ六七日經ちますと猿屋町の大名主大塚殿から使が參りましたに依つて善七は手代を一人連れて早速參りますと吉右衛門が面会して善七を庭へ坐らせ「其方の配下山五郎といふ者が此の間喜兵衛より金子を借り其の催促に參つた時大勢寄つて打擬

をしたさうだナ　善「旦那誠に恐入りましたそれに相違ございませぬ、けれども彼の喜兵衛といふ者は、旦那の前でございますが新堀端の小屋はかもでない堂前又は新町の連中なぞにも金子を貸してをります、旦那方のなさることではございませぬ（昔此の仲間では自分の組の者でない人を指して皆旦那〳〵と言てをつたものと見えます）それゆゑ若者が心得違を致しましたが二三人の者は江戸を逃げて仕舞ひ由五郎も唯今は江戸を立つて何處へ參つてをりますか分りませぬ調べろとあれば手前共の方から取調べます　吉「イヤそれはモウ已れの方から咎めるのでない併し善七能く氣を付けろ彼の喜兵衛といふ奴は金子に任して惡いことをする之れを遺恨に心得て又其方達の仲間にどんな無体なことをするかも知れぬから内々其方に注意をして遣るのだ」

仁愛の大名主大塚吉右衛門殿の言葉に善七は喜んで立帰り是れから由五郎夫婦おたまの三人に申聞けましてそれでは兎に角以前の新堀端へ歸つて崇知らぬ顔をしてゐる譯に行かぬから何とか話をしたら宜からうと車

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

善七の儀侠よりして金子十五両を呉れましたゆゑ之れを持つて由五郎夫婦が夜分密かに閻魔の喜兵衛方へ参る、それには文善七の手代も一人、万一喜兵衛がどんな遺恨返しをするかも知れぬと遠見隠れに附いて参りました、

由五郎夫婦は瓦町の喜兵衛の家の脊戸口からッと這入りまして地上に両手を突き「旦那誠に以て相済みませぬ、私も大勢の奴等が致したことから江戸にゐられなくなりました、といつて他國へ参つて住める身体でございませぬお借り申したお金子此の十両耳を揃へてお返し申しますそれに前に這入つてをりますお金子もございますが、それはなしと致して此の五両は旦那誠に相済まぬことですが膏薬代としてお受取り下さい、どうか我々親子三人の者が矢張り以前の新堀端の小屋に帰つて住へるやうにして戴きたう存じます」と由五郎が言葉叮嚀に申入れ散々打たれた遺恨返しに喜兵衛が此の場で何をするか知れぬと心配してをりましたが此奴も中々抜目のない奴ですから、さうかざういつて来りやァ仕方がねい打たれたのは

己れが悪い　それちア持って来た十五両膏薬代を非人小屋から貰ふのは恥辱だけれども己れも大層是れが爲めに金子を使つた、それぢやア此金は貰つて置かう」と早速承知して呉れましたので由五郎夫婦も一安心して十五兩の金子を向ふへ渡し、程能く其の場を立去りました、

茲で又改めて由五郎が新堀端の家へ歸つて住をりましたがどうしても此の喜兵衛といふ奴がおたまを自己の物にしやう彼女を姦さうといふ心が失せぬ所から類は友を呼ぶ惡黨仲間の一人を語ひましして一ツの計略を以ておたまの身体を捲上げましして由五郎夫婦の者に難儀をさせる是れおたまが美婦に生れましたが爲めに養親の由五郎夫婦の大難に相成りまする一条

第十八回

其の時分本所の報恩寺橋向ふに僅か五六軒でございますが小屋者がありました此の報恩寺橋の小屋者の中に角兵衛といふ者があつて是れが其の

五六軒ある小屋者の頭でございます矢張り女太夫もをりますれば又は辻芸をして歩く者もをります、

此の角兵衛といふ者も折々瓦町の喜兵衛から金子を借りてをります或る日喜兵衛が角兵衛の家へ金子の催促に參りました　角「イヤ旦那でございますか誠に相濟みませぬが……　喜「イヤ〳〵　角兵衛さん行かぬぞ〳〵何時來ても同じこと、相濟まぬ〳〵　ぢやァ行かぬ今日は是非悉皆貰つて行く積りで來た　角「所が旦那ご存知の通り家の女房が煩つてをりまして仕事に出られませぬ、女房の爲めに食はして貰ふといふのはお恥かしいことですが女太夫や何かの亭主は皆こんなものです　喜「ぢやァ仕方がねい、煩つてゐるものを無理に取つて往かうといふんぢやァねい角兵衛共の女太夫で思出したがお前に」れがチツと嬉みていことがわある酒を一杯買って呉んネー　角「旦那、此の小屋で……　喜「宜いてユことよ他の者と違ふ己れはお前達の小屋へ這入るのは平氣なもんだ」例にない此の喜兵衛が打解けをして家へ上つて来て、莚屏風の蔭に女房は寐てをります、

角兵衛は直ぐに喜兵衛から錢を受取りまして近所から酒を一升買つて來て「旦那、何もで馳走は……　喜「宜いとも〳〵　已らァ家にゐて何時でも香物で酒を飲むんだお前もチッたァ飲むだらう　角「へイ私も戴きますが此の節は錢がないから濁酒も飲めませぬ　喜「さうか」

角兵衛にも飲ませ自分も飲み　喜「時に角兵衛、女太夫で思出したが新堀端の由五郎の娘おたまナ……　角「旦那まァ先達ては飛んでもないことでございましたお見舞に上らうと存じましたが餘りお氣の毒でお見舞に上りませぬでした　喜「ン見て呉れトウ〳〵　已れの左の足はこんなになつて仕舞つた、所がお前に頼みといふのは他ぢやァねい已らァ恥かしいことだが此の年をして人に笑はれるか知らねいが彼のおたまの阿魔に　角「イヤ旦那恥かしいことはございませぬ、モウ此の江戸市中の旦那方が小屋者でなけりやァ疾に金子の千兩二千兩と積んでおたまを自由になさるお方がありますが彼女とても元と小屋者ぢやァありませぬ番町の奥田様といふお旗下のご用人で水谷さんといふ方の娘さん彼の由も元から小屋者ぢやア

ありませぬ放蕩から折助になつてそれから小屋へ落ちました者それで旦那どうしやうといふんで　喜「宜いか世間に……　角「なに私の家は四邊を離れた一軒屋どんな大きな聲で話をしても旦那何も他人に聞えることはございませぬ何でございます　喜「實は彼のおたきの一條だが、どうだ角兵衛たつた一遍でも已れが手に入れていと思ふんだ深山の金子も出せぬいが首尾能く行けばお前に禮金を二十兩や三十兩は遣るが昔は女子が男子に恋煩ひ、今ぢやァ却つて男子が女子に懇煩ひ　角「へイそりやァ旦那、

惚れ藥佐渡から出るがいつち利く

といひますナ何でも金子づくでどうでもなるもんです宜うがす工夫をしませうから……　喜「ヨシ其の工夫といふのは　角「旦那お耳を拜借」と角兵衛は喜兵衛の傍へ擦寄つて何やら小聲で話をした、

餓いた焔魔の喜兵衛「それぢやァ角兵衛頼んだぜ　角「宜うがす　喜「それぢやァ其の日に間違なく夕方から來る也、イヤ大きに飛んだ邪魔をした」色情に迷つた焔魔の喜兵衛人交りが出來ない非人小屋角兵衛の家で一杯飲ん

で急いで戻る瓦町の家、女房のお虎は至って怪気深い者ゆゑ此の樣なことを、話は昨夜今日よ明日よと待つ中に角兵衛と豫て約束の日になりましたゆゑ其の日に喜兵衛は年を取つても色気は充分朝湯に這入り頭髪を束ね手足の爪などを取りイヤモウ実に鼻持のならぬ位匂袋を買ふのは不廉と極勾ひの附いてゐる齒磨を二袋兩の袂に入れまして老人にはニヤケた姿見るさへ心地の惡いやうな裝をして本所報恩寺橋向ふの小屋者角兵衛の家へ來たのが丁度入相過ぎ、

其の時角兵衛の女房大夫のお慶はモウ病気も癒り夫の角兵衛と共にサア〳〵旦那此方へ〳〵大層お速くお入來なすつた　喜「どうだ角兵衛首尾は　角「旦那細工はりゥ〳〵仕上げをご覽じろ……それぢやァ約束通り二十兩の金子を……　旦「オッと角兵衛待つて呉れ未だおたまが來て己れの心通りに行かねい中にッックり渡す譯に行かねいから手附として五兩渡して置かう　角「何時も旦那はご如才ない高利貸の駈引き……　喜「コレ〳〵こんな所でそんなことを言ふな　角「宜うがす」と五兩の金子を前に受取り

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.